

まごころの通ずるすがた

或る絵の展覧会に、若く美しいママさんが子どもの

口もとにスプーンで食物を運んでいる絵があった。これを見た一人の禅僧が、「これじゃ、だめだ」と、つぶやいた。そのわけをたずねると、

「子どもに口をあかせようとするならば、匙を運ぶその人が大きな口をあけなくてはならぬのにこの美人はツンとすまして口を結んでいる」と

と答えたという。

子どもに物を食べさせようという心(意)があれば、自分は食べなくとも「アーン」と口を開き、そしてスプーンを子どもの口もとに運ぶという動作(身業)が生まれてくるように、身口意の三業が期せずして一つになる。かわいい子どもに対する時だけではない。う

れしい時も悲しい時も、身口意の三業が一つになって躍動するところに、まごころが相手に通じ、感応道交するものである。

ほとけさまを拝む時もそうで、余念雑念をまじえない淨信そのものの心になった時、口はおのずから仏名を唱え、身体は合掌低頭するのである。

むかし、或るところに「念仏ばあさん」といわれるほど、朝から晩まで念仏を唱えているばあさんがおつた。このばあさん、寿命が尽きて、すべての死者のあゆむ道をたどり、エンマ大王の前に立たされた。エンマ大王はばあさんを一と目みるなり、

「地獄行き！」

と宣告した。ばあさんは、エンマ大王をにらみ返して抗議した。

「私は念仏ばあさんといわれたほどのものです。地獄行きとは見たて違いです。エンマさまにも、千に一つ万に一つ間違いがあるかも知れないと思い、生前に唱



えた念仏を車に積んで持って参りました。調べてみてください」

「ワシの目に狂いはないはずだが、証拠の品持参とあれば再審してつかわす。鬼ども、調べろ！」

そこで鬼どもが大八車に積んだ念仏を片っ端から箕みでふるいにかけて。すると、パッパッパッとみな飛び散ってしまう。ばあさんの念仏はカスばかりで実がない。

「それ見ろ、お前の念仏はみな空念仏ばかりだ。どうじゃ、わかったか!？」

その時、赤鬼が叫んだ。

「大王さま、一つだけ残りしました」

「何、一つ残った？ どれ、どれ……ウーム、小粒ながらこれはほんものだ！」

そこでこの一粒を調べてみると——或る夏の日のこと、彼女がお寺参りに出かけたとき、一天にわかにか

きくもり大雷雨となった。ばあさん、大樹のもとに雨宿りしたところ、目の前の杉の大木に一大音響と共に落雷した。その瞬間、ばあさん、思わず知らず「なんまいだ！」

この念仏だけが実のあるたが一粒として箕に残った。おかげでばあさん、地獄行きは免れたという。

ほとけさまを拝むには、身口意の三業のチャンネルを合わせなくてはならない。



佐藤俊明